

平成31年度 国語部会研究計画

1 研究主題

**実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導
—対話的な活動を通して、思いや考えを深める単元の構想と展開—**

2 研究主題設定の理由とその考え方

(1) 主題について

① 社会的背景

グローバル化の進展に伴い、社会構造は大きく急速に変化しており、未来予測の困難な時代となっている。これからの時代を生きる子供たちには、種々の社会変化やそこから引き起こされる様々な問題に柔軟に対応していく力が求められている。

② 「実生活に生きて働く言語能力を育成する」ことの必要性

子供たちが社会や世界とかがわり合い、現在あるいは将来の生活に起こりうる諸問題を解決していくためには、生涯にわたって活用できる概念を獲得したり、情報や既存の知識から自分の考えを構築したり、自分の思いを的確かつ豊かに表現したりするための言語能力を身に付ける必要がある。本会では、これらの言語能力を「実生活に生きて働く言語能力」と呼び、平成28年度から「実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導」を研究主題に掲げて、単元学習の理念を生かした国語科学習指導を基本に、子供一人一人の「実生活に生きて働く言語能力」の育成に取り組んできた。本研究では、言語生活全体を通して、これらの言語能力を子供一人一人に培うことを目指すことから、「国語科学習指導」とした。

③ 本県における研究の成果

今年度、小松島市において第37回徳島県小学校国語教育研究大会が開催される。会場校となる小松島市坂野小学校は、研究主題「実生活に生きて働く言語能力を育成する国語科学習指導—表現することを通して、思いや考えを深める単元の構想と展開—」を受けて、昨年度より本研究を進めてきた。特に、思いや考えを深めることに有効に働く「他者とのかがわり」に焦点を当てて、「対話的な活動」を効果的に取り入れた単元の構想と展開が研究された。昨年度、同校にて開催された研究大会では、学習課題の解決に向かう過程において、思いや考えを表現する必然性のある「対話的な活動」を位置付けることにより、子供一人一人が自ら思考し、他者や自己との対話を通して思考を深めていく国語科学習指導が提案された。

(2) 副主題について

① 思いや考えを深めるために

知識・技能が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうとき、思いや考えは深まる。思いや考えを深めるためには、情報同士の関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして表現したりすることが必要となる。国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりするなど、「言葉による見方・考え方」を働かせたい。その際、言語能力育成の中心となる国語科としての役割を果たすためにも、言語活動が核となる。

② 「対話的な活動」の有効性

○中央教育審議会教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」平成28年8月26日

・新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている。また、言葉を使って知識と知識の間のつながりを捉えて、構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。

・思考・判断・表現するプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言葉が重要な役割を果たしている。

・子供自身が、自分の心理や感情を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力の獲得は、他者からの言語による働きかけや思考のプロセスの言語化を通じて行われる。

子供は、学習課題の解決に向かう過程において、他者のさまざまな思いや考えと出会うことにより、自分の思いや考えを広げていく。また、子供の直面する学習課題の中には、思いや考えが広がることでこそ、解決し得るものもあると考えられる。そこで、学習課題の解決に向かう過程に、必然性のある「対話的な活動」を位置付けることの効果が期待される。ここでいう「対話的な活動」とは、「他者と言葉を介してかかわり合う過程において、他者や自己との対話を重ねながら、自分の思いや考えを広げたり深めたりする言語活動」のことである。

対話的な活動を通して、他者の思いや考えと出合った子供は、自分の考えに確信を得たり、学習課題の解決にどのように生かせるかを判断したり、自分の思いや考えとの関係性を整理したりするようになる。その結果、他者や自己との対話が活性化され、学習課題を多面的・多角的にとらえることが可能となる。また、結び付ける対象となる知識や技能と、その結び付け方に多様性が生まれ、子供一人一人の思いや考えをより一層深めることができると考えられる。

このような「対話的活動」の有効性を踏まえ、「対話的な活動を通して、思いや考えを深める」ことのできる単元を追求することにした。

③ 単元の構想と展開

「実生活に生きて働く言語能力」を育成するためには、子供の興味・関心に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動（＝単元）を構想し、学習課題の解決を目指して学習者が意欲的・主体的に言語活動を展開することが効果的である。これまでの研究の成果から明らかとなった単元の要素を以下に示す。

- ・単元を通した指導目標と子供の活動目標が明確に設定されていること
- ・身に付けるべき言語能力を着実に育成することができること
- ・実生活に生きる言語活動が単元に位置付けられていること
- ・子供の興味・関心に根ざし、探究することができること
- ・教材等の複数化・個別化が図られ、子供の主体性を重視していること
- ・展開の過程に、他者と関わり合う交流の場が位置付けられていること
- ・学習の自覚化を図っていること
- ・子供の発達に応じ、教育課程全体を見通した言語活動が位置付けられていること

これらの要素の、いくつか、あるいは、全てを有する単元が、「実生活に生きて働く言語能力」を育成することのできる単元であると考えられる。このような単元を構想することは、新学習指導要領においても重視されているカリキュラムマネジメントの一つの側面である。今年度は、平成30年度までの研究の成果と課題を踏まえた上で、「対話的な活動を通して、思いや考えを深める単元の構想と展開」について研究を進めていくこととする。

3 研究の内容と方法

(1) 「対話的な活動を通して、思いや考えを深める単元の構想と展開」に関する研究

言語は言語形式とそれによって表される言語内容を併せもっている。言語を扱う教科としての特性から、国語科の指導目標には、形式（方法・技能）的側面と内容（価値）的側面とがある。この両側面から「対話的な活動」の在り方を研究していくことが、その充実につながると思われる。

○本研究における「他者」とは、子供をはじめ、教職員や地域の人々、先哲、学習材等を指す。

○自分の思いや考えとの関係性を整理する例として、自他の思いや考えを様々な視点から検討し、共通点や相違点、利点や問題点等を見出したり、なぜ違うのかを捉えたりすることが考えられる。

○本会は、経験主義の「単元学習」を方法ではなく理念として捉え、系統主義との融合を図ろうと、これまで「単元学習の理念を生かした指導」に取り組んできた。

○子供の実態や教師のねらいに応じて、「単元学習の理念を生かした指導」を意図的・計画的に繰り返すことが、授業改善への確かな道筋になると考えられる。大単元と小単元のそれぞれの利点を生かしながら、年間指導計画を立てることが必要である。

① 「対話的な活動」を内容（価値）的側面において充実させるために

他者との対話の前には、必ず自己との対話がある。自己との対話を促すためには、具体的な体験と結び付く学習材を用意したり、関係性のある学習材を組み合わせたりすることが効果的だと考えられる。学習材から得られた知識と知識の関係性を把握することにより、思いや考えが生まれるのである。

魅力的な学習内容と出会うことにより、子供一人一人の内面に思いや考えが生まれるが、加えて他者と交流する必然性・必要性が生まれなければ、思いや考えを深めることのできる「対話的な活動」は成立し得ない。そのため、学習課題は、明確な根拠をもち且つ複数の答えの考えられるものや、他者とともに練り合うことで完成するものなどが望ましい。共有された学習課題の解決の過程で、自分の思いや考えを他者に表現し伝えたい、他者の思いや考えを知りたいという意欲が高まり、必然性のある「対話的な活動」を実現することができるように、子供一人一人が本気で追究したくなる学習課題の内実を明らかにしていきたい。

② 「対話的な活動」を形式（方法・技能）的側面において充実させるために

「対話的な活動」においては、話し合いが焦点化されるように論点を絞ったり、多角的・多面的に考えられるように観点を広げたりする教師の手立てが求められる。また、表現の工夫（対比、伏線、象徴など）に着目するための観点を示した「学習の手引き」を作成して指導することも考えられる。子供一人一人が「言葉による見方・考え方」を働かせながら、自己の思いや考えを学習課題の解決に迫るものに深めていくことができるように、対話を活性化する方法・技能と、それらの育成に効果的な指導方法について明らかにしていきたい。

「対話的な活動」を成立させるために、教師は、子供の発達に応じた表現の技能・方法を精選して指導するとともに、学習過程のどこに設定するかを考えておく必要がある。例えば、1 単位時間の学習において、①課題の把握、②自分の考えを書く、③班で考えを述べ合い、班全体の意見をまとめる、④学級全体に向けて発表するなどの段階的な学習過程を設定して、単元を通じて反復的に指導していく方法が考えられる。あるいは、単元間において、表現の工夫に気付いて読み取り方を学ぶ単元と前単元で学んだ表現の工夫の読み取り方を生かした単元とを連続的に展開しながら指導していく方法などが考えられる。

（2）年間指導・評価計画に関する研究

① 子供の発達に応じた言語活動を位置付けた年間指導・評価計画

言語能力を体系的に把握し、意図的・系統的に育成していく上で、6年間を見通した年間指導・評価計画は欠かせないものである。この年間指導・評価計画に子供の発達に応じた言語活動を位置付けることにより、無理なく、効果的に「実生活に生きて働く言語能力」を育成することが可能となる。

言語活動を選定する際には、他教科等との関連を考慮したい。他教科等との関連を図ることで、単元に位置付けた言語活動に必然性を持たせることができる。子供が必然性のある言語活動に取り組むときにこそ、「実生活に生きて働く言語能力」を育成することができるようになる。

② 「目標設定—指導—評価」の一体化

子供一人一人に応じた言語能力を的確に育成するためには、単元を構想・展開していく上で、「目標設定—指導—評価」を密接に結び付ける必要がある。

例えば、教師の指導目標を子供の姿で表現し、子供一人一人の学習状況を明確に

○自己との対話を促すためには、例えば、おもちゃで遊んだ後に、そのおもちゃに関する本を読む活動を設定して、対象に対する思いを膨らませることが考えられる。また、同一作者の作品を重ねて読んだり、題材やテーマの重なる作品を比べて読んだりすることが考えられる。

○平成28年度の研究において成果が得られた「書く活動」を効果的に取り入れたい。書くことよって、子供は自分の思いや考えを明確にし、自信をもって発言することができるようになる。

○国語科における言語活動を他教科、あるいは日常生活と関連付けることにより、生きて働く言語能力が育つ。

○評価については、平成32年度より、文部科学省の示す資質・能力の三つの柱に基づいた3観点での評価について研究を進めていく。

評価する。そして、個々の学習状況から、それぞれのつまづきをどのように克服させていくか、あるいは、どのように伸ばしていくかなど、個に応じた指導・支援を計画し実行することが、「目標設定—指導—評価」の一体化を図ることの例として挙げられる。さらに、これまでの学習過程で得られた評価に基づいて、子供一人一人の個性や能力に応じた目標を設定した単元を新たに構想・展開することにより、一人一人が主体的に学ぶ国語科学習指導を創造することができるようになる。

(3) 日々の国語科学習指導に関する研究

① 読書生活の改善・充実

子供の豊かな読書生活をつくるために、読んだことから自分の求めている情報を発見したり、読むことで自分の中に新たな思いや考えを創り出したりする読書へと高めていきたい。そのためには、目的に応じて読む本を選んだり、目的に応じた読み方(精読・速読等)を選択したりすることができるようにしたい。単元に並行読書を位置付ける場合には、中心となる学習材との関連性に配慮し、読むことの必然性や必要感が生じるようにしたい。

② 「作文読本」の効果的な活用

「作文読本」を活用することは、他者・自己との対話を保障するとともに、読み書きすることによって思いや考えを深めることに寄与する。

「作文の広場」に作品を投稿することは、書くための強い動機付けとなり、作品が掲載されることは書くことに対する自信につながる。また、「練習」の例文や「作文の広場」に掲載された同学年の作文は、格好のモデルとなり、書く技能の向上に効果がある。さらに、「作文の広場」に掲載された作文を読むことを通して、読み手としての思いや考えを深めることも意義深い。

③ 「学習の手引き」の工夫と活用

子供の実態や目的に応じた「学習の手引き」を工夫し活用することは、子供一人一人を必要とする他者・自己との対話に導くとともに、自ずと「言葉による見方・考え方」を働かせ、思いや考えを深めることの手助けとなる。

例えば、書くことによって思いや考えを深めることを目的とする「学習の手引き」として、書き出しや観点を示した手引きが考えられる。手引きの方法を考える際には、子供が自分の思いや考えを発掘したり、とらえたり、整理したり、まとめたりすることができるように例示する言葉を工夫する必要がある。また、話すことによって思いや考えを深めることを目的とする「学習の手引き」として、「話し合いの台本型手引き」が考えられる。作成する際は、話し合いの進め方を理解するだけのものに留めず、多角的・多面的な見方による意見や、相手の意見を受けて自分の思いや考えを深めていく思考過程を意図的に配置していくなどの工夫が必要となる。

④ 「学習の記録」の効果的な活用

子供が自らの学びの過程を振り返り、自己評価していくことにより、学びを自覚することも重要である。そこで、「学習の記録」を効果的に活用することにより、振り返りを通して、新たな学びにつながる対話が生み出されるように指導する。

「学習の記録」には、学習の手引きや成果物、振り返りなどの子供によって書き残されたものと、音声データや映像などのICT機器によって蓄積されたものとが考えられる。「学習の記録」を活用する際には、教師が子供の学びにどのような価値があるのかを認め、子供がその意味に気付き、自己の獲得した言葉の力を自覚するとともに、活用していこうとする意欲につなげていきたい。

○学んだ結果を評価するとともに、子供の言葉の生活や学びの過程、学ぼうとする意欲や態度を継続的に評価することが大切である。評価が子供一人一人の意欲を高め、言語能力を身に付ける手立ての一つとなる。

○「読書生活の指導」に取り組む際には、学校と公立図書館との連携・協働を図りたい。また、図鑑や新聞等の幅広い情報源の活用を含めた読書生活の改善・充実にも取り組みたい。

○「学習の手引き」には、教師による言葉かけが含まれる。子供一人一人が困らないように、何を、どのようにすればよいかを示したり、言葉や表現に注目することができるような観点を示したりするなど、さまざまな手引きが考えられる。